

越中万葉



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなざる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのびります。



二上山の大伴家持像



写真提供：幅谷 廣司

雪の上の
照れる月夜に
梅の花
折りて贈らむ
愛しき子どもがも

揮毫 中尾 哲雄

雪の上に 照れる月夜に 梅の花
折りて贈らむ 愛しき子どもがも

大伴家持(巻十八・四三三四)

【歌意】雪の上に月が照り映える美しい夜、梅の花を折って贈るような愛しい人がいてくれたらなあ。

《解説》

この歌は天平勝宝元年(七四九年)十二月に詠まれました。太陽暦では二月初旬にあたります。「宴席に雪月梅花を詠む歌一首」という題がついており、雪月花の三つの景物を同時に詠み込んだ初めての作品です。庭に降り積もった雪を皓々と照らす月と白い梅の花…。酒を酌み交わしながら「梅の枝を贈る愛しい女性がいたらなあ」と詠む家持。宴は大いに盛り上がったことでしょう。「雪月花」は、白居易の「雪月花時最憶君(雪月花の時 最も君を憶ふ)」の詩で知られますが、白居易の詩は八、五年頃の作。家持はそれより七〇年以上も前に三つの景物を詠んでいました。家持の時代、中国渡来の梅は好んで貴族の庭園に植えられました。当時、梅といえば白梅のごとく、紅梅はもう少し時代が下って登場します。万葉集には梅を詠んだ歌は約二二〇首あり、約一四〇首の秋に次いで多く詠まれています。